

子どもと算数を創る

— 数学的な考え方の育成を目指して —

1. 少人数学級について

本校では、年度始めに6年1組35名(男子19, 女子16), 6年2組34名(男子19, 女子15), 6年3組34名(男子18, 女子16)の計103名(男子56, 女子47)を均等に5クラスに分けた。本学級少人数6年緑組は、男子11名, 女子10名の計21名在籍している。

少人数授業は、国語と算数の2教科を実施し、6年担任3名と少人数担当3名の計6名で授業を進めている。

2. 授業の主張点

- (1) 「比例」の単元は練習を入れて9時間扱いとなっている。しかし、机上の学習で「比例」を学ぶだけでなく、実際に教室を出てロープやホースの長さを測り、机上の計算とあまり大きな違いがないという、実際に体験して感動する場面を取り入れたいと考え、指導計画を少し変えた。そうすることにより、「比例」のよさを実感し、楽しさの中によくわかって学ぶということ、生活に基づいた身近なものに興味をもって難しいけど何かやってみようという意欲がわくのではないかと考えたのである。そのため、「比例」の7時間の学習の後に、「はかり方のくふう」の2時間を加え、全部で11時間の指導計画を立てた。

このように、算数的活動を通して数学的な考え方を育てることができると考えている。この「はかり方のくふう」での算数的活動を取り入れることにより、研究部提案の数学的な考え方の中の、**統合**(獲得した「比例」の特徴を、より高次の視点からとらえることができる。)と**拡張**(獲得した「比例」の特徴を、さらに日常生活まで広げながらまとめる。)の考え方に有効に働くのではないと思われる。

- (2) また、一度体験した算数的活動や学習した内容を振り返らせる機会とするために、そして、自分の考え方やわかり方を見直すために、さらに算数に対する意欲がわいてくるために、単元ごとに「算数新聞」を書かせるようにしている。

この「算数新聞」を書くということは時間がかかるとは思うが、この中にはじめはわからなかったことがわかるようになったとか、既習事項を使ってやっと解けたという変容を書くことも算数的活動の一つであると考えている。この活動を通して、自分で山を登って越えたときに得られるような「楽しさ」が味わえるものと思われる。これが、先ほどに述べたように次の学習への意欲につながるものと考えている。